



Title	焦点化に関する考察
Author(s)	萩原, 康一郎
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 2002, 36, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48210
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

焦点化に関する考察

萩原 康一郎

0 はじめに

物語の視点 (point de vue) を扱う際にわれわれが直面する困惑は、そこでの問いが共通の平面を欠いていることに由来する。実際、この語が使われるとき、作中人物のものの見方が問題とされているのか、作者の物語言説への介入度が問題とされているのかなど、きわめて曖昧な点が多い。『物語のディスクール』(Genette: 1972)におけるジュネット (Gérard Genette) の功績の一つは、それまで漠然と用いられてきた視点という語に代えて、焦点化 (focalisation) という「さらに抽象度の高い術語」を導入し、固有の意味での視点 (誰が見るのか) と語り (誰が語っているのか) という異なる二つの問題領域を分離して、諸説の混乱を解きほぐしたところに認められるだろう。

とはいえ、ジュネットの焦点化に関する議論が十分に納得のゆくものではないことは、その後の「大量の、おそらくはいくぶんか過剰な」反響・批判を見ても明らかである。また、物語論全体の枠組みから見ても、この問題に関しては用語の整理や概念の精密化といった課題が数多く残されているように思える。本稿では、ジュネットの焦点化の議論が孕んでいる問題点について指摘し、これを再検討してみたい。

1 ジュネットの焦点化モデル

ジュネットの視点論を振り返っておこう。ジュネットはバンヴェニスト

(Benveniste: 1966) と言語学者によって示されたディスクール理論を物語研究の場に応用して、物語を物語言説 (récit)、物語内容 (histoire)、物語行為 (narration) の三つのレベルに分離し、これを前提とする。次に彼は以上の前提から導き出されてくる諸問題を、独自の分類基準に基づいて、時間 (temps)、叙法 (mode)、態 (voix) の三つに大きく範疇化する。これら三つの範疇は個々の問題のあり方に応じて、さらに分析的に下位分類される。この樹木状の分類体系が、そのまま『物語のディスクール』の書物の構成にも合致してくるのだが、視点の問題はそのなかでも物語情報の制御の問題を扱う「叙法」の範疇に組み込まれる。この章は大きく次の二つの範疇から成り立っている。一つは距離 (distance) の範疇で、ここではもっぱら物語言説が提供する情報の詳細の問題が扱われる。もう一つが、視点の問題が扱われるパースペクティブ (perspective) の範疇で、ここでは物語言説による情報の制限の問題が扱われる。先にも述べたように、ジュネットは、視点という語にまつわる「視覚性を払拭」するために焦点化という術語を提案し、①語り手が作中人物より多くのことを知っている (非焦点化 focalisation zéro) か、②ある作中人物が知っていることのみを知っている (内的焦点化 focalisation interne) か、③より少なく知っているか (外的焦点化 focalisation externe) か、によって諸作品を分類している。具体的には非焦点化は、「一般に古典的な物語言説に代表されるようなタイプ」で、いわゆる「全知の語り手」の名で知られてきたタイプがこれに該当する。外的焦点化は、「主人公の思考や感情については、われわれは決して知ることができないタイプ」である。そして内的焦点化であるが、これは、(a)作中人物の一人にのみ視点が制限される内的固定焦点化 (-fixe)、(b)焦点人物が物語言説の進行とともに推移する内的不定焦点化 (-variable)、(c)「何人かの作中人物が、それぞれの視点を通して同一の出来事を何度も喚起する」内的多元焦点化 (-multiple)、にさらに下位分類される。

2 三分法批判と、花輪の分類体系

ジュネットの焦点化の三分法（非焦点化／内的焦点化／外的焦点化）が、一貫した基準に基づく分類でないことは、比較的早くから指摘されている。バル（Mieke Bal: 1977）は、ジュネットの三分法のうち、内的焦点化と非焦点化とは、物語言説が任意の作中人物の視点を採用して、その人物の知りうる範囲に情報を制限するか、あるいはそうした制限を行わないか（知覚の主体の基準）によって区分され、他方で内的焦点化と外的焦点化とは、物語言説が関心の対象とする作中人物の内面を描くのか外面を描くのか（知覚の対象の基準）によって区別されており、異質な二重の基準が混用されていると批判している。

これに対して花輪（花輪：1979）は、ジュネットの焦点化の分類は、そもそものはじめから並列的なものとして提示されているのではなく、まず上位クラスで何らの制限も課せられない非焦点化と、何らかの情報の制限を有するいわば「有-焦点化」に大別され、さらにこの後に、ある人物の意識を採用することによって物語言説を制御する内的焦点化と、物語言説の関心の対象たる人物の外面を一貫して描く外的焦点化とに下位区分されるものとして理解している。

焦点化の三分法の非均等性を上下二クラスに分割して理解することは、一見、ジュネットの真意に適っているように思えるが、『物語のディスクール』を振り返って検討するに、ジュネットがこうした分類を意図していたかどうかは実はかなり疑わしい。個々の焦点化のタイプの定義の際に、語り手と作中人物との情報差を基にして「>」「<」「=」という三つの等式の符号¹⁾を用いている（Genette 1972, 邦訳 p.221）ことから考えても、やはりジュネットは三分法を意図していたと考えるべきではないだろうか²⁾。

以上、ジュネットの三分法に関する議論の展開を簡単に振り返った。批

判的であるか、弁護的であるかの違いはあるにせよ、どちらの論者も、焦点化の三分法には、①誰の視点から見ているのか（語り手か作中人物か）という「知覚の主体」の基準と、②物語言説が関心の対象とする作中人物の内面を描くのか外面を描くのかという「知覚の対象」の基準、が二重に含まれているとする点では共通している。以下ではこうした二重性の指摘自体が妥当かどうかとも視野に入れつつ、ジュネットの焦点化論を改めて検討してみたい。

3 情報制御の分析概念としての焦点化

そもそもジュネットは焦点化をいかなる意味で用いていたのだろうか。ここで彼自身による焦点化の定義を振り返ってみよう。

物語言説は、もはや一様な選別によるのではなく、その物語内容のしかじかの引き受け手（一人の作中人物もしくは作中人物のグループ）の認知能力に応じて、自己の伝える情報を制御することを選ぶ。 (Genette 1972, 邦訳 p.88)

ともかく焦点化という術語で私があらわそうとしているのは、「視野」の制限、すなわち物語情報に加える選別にほかならない。 (Genette 1983, 邦訳 p.78)

また、ジュネットが「視点」という語をわざわざ焦点化に切り換えたのには、次の二つの意図が読み取れる。第一の意図は、「視点」を字義どおりに受け取った場合に生じる不都合を避けるためである。すなわち、この語では見る-見られるという視覚の問題に限定されてしまい、認知行為全般（聞く、知る、思う）が問題圏から外されてしまう恐れがあるためである (Genette 1983, 邦訳 p.68)。第二の意図は、そもそも「視点」という用語に内在していた曖昧な意味内容から語りの問題圏に属するものを切り離し、固有の意味での視点問題だけを扱うことができるようにするために

ある (*ibid.*, p.78)。

このように見てくると、ジュネットは、物語における「視点」の様態を純粋に形式的観点から記述することを可能にする分析概念として、焦点化という術語を提案していたことがわかる。ここに見て取れるのは、例えばリクールなどの解釈学的方法論や認知心理学的な問題意識とともに扱われる、「心理主義的、人間主義的な色彩」(神郡 1990, p.52)を帯びた視点論を、物語論の場から切り離し、この問題を一貫して情報制御の様態として扱おうとする意図なのだ。

それだけに、ここでいよいよ際立ってくるのは、焦点化という術語のまずさである。上の第二の引用文からもわかるように、ジュネットのいう「焦点」は、その通常の意味とはかなり異なった意味で用いられている。こうした特殊な意味付与が、ジュネット本人の意図を十全に反映させるに適しているとはとうてい思えない。端的にいつてしまえば、指し示さんとする内容と、その表現とがあまりにかけ離れているのだ。

もともと「焦点」という語は、例えばブルックス、ウォーレンの「語りの焦点」(Brooks&Warren 1943.)という語にも見られるように、物語論がまだ視点論から語りの領域を明確に区分していない段階から用いられており、ほとんど「視点」の代用品としての機能しか果たしていなかった³⁾。ところで、ジュネットが視点論を語りの領域と分離した時点で、視点論はもはや、見ることにまつわる理論から、語り手を機能上の情報制御の主体として設定し、この主体が物語言説に行う情報の組織化の様態を記述する理論へと、決定的な、もはや後戻りできない一步を踏み出したのだといえる。だとすれば、焦点化という術語に見られる表現と内容との乖離は、単に術語の選択の不幸際さとして片づけられないものを含んでいることになる。再三にわたって情報制御の問題であることを強調しながら、あくまで古いタイプの、視覚のコノテーションを含む焦点化という語を手放さなかったこと、ここに見て取れるのは、おそらくジュネット本人にも明確には

意識されていないある種のためらいではないだろうか。おそらくこうしたためらいこそが、彼の視点論をことさらにもつれさせていると同時に、「方法論的整備が手薄」(花輪1979, p.2) だと感じさせる端緒となっているように思われる。

いずれにせよ、われわれとしてはジュネットの論の不徹底さにとどまるわけにはいかない。彼がそれと知らずに予感した方向へと——事の是非は今はい問わないことにして——推し進めなければならない。そこでわれわれは、語り手-物語言語説⁴⁾を物語における情報制御の主体として設定し、この観点から改めて先の三分法の二重の基準を捉え直して、この議論に必要なと思われるいくつかの基準を抽出しようとする。

4 「知覚の主体」の基準と作中人物の認知行為について

焦点化の三分法には、二重の基準が含まれているのだった。その最初のものが、非焦点化と内的焦点化とを分かち、「知覚の主体」という基準である。この基準を基にして、花輪は、非焦点化を、「あらゆる部分が、ある作中人物の視点からではなく、語り手の視点から物語られる」こととし、内的焦点化については、「ある作中人物の視点から物語られる。つまり、その作中人物は語り手の視点対象であるだけでなく、語り手と『ともに見る』状態にある」と説明し、非焦点化と内的焦点化との区別を、「語り手だけが見るか語り手と作中人物が見るかの違い」に認めている(花輪1979, p.6)。こうした理解は独自のものであり、ジュネットの意図とかなり食い違っているのは明白だ。そのことは「語り手の視点」、「作中人物の視点」という言い方からも窺える⁵⁾。

バルに關しても同じことがいえる。バルはジュネットの焦点化モデルを批判・修正して、新たに焦点主体 (focalisateur)、焦点対象 (focalisé) という概念を導入したことで知られる (Bal 1977, p.32)。彼女の場合、単純にいて、前者を、何事かを見る作中人物、後者を、前者によって見

られる作中人物という意味で用いており、作中人物Aに見られることで焦点対象となった作中人物Bが、今度は彼自身で焦点主体となって、作中人物Aを焦点対象にするといった「入れ子構造」を扱うための分析概念として提示している。ところで、ジュネットはこのバルの概念に関して以下のように述べている。

私の考えでは、焦点化をおこなう作中人物というもの、焦点化された作中人物というものも存在しない。焦点化されたという表現は物語言語そのものにしが適用しえないし、また焦点化をおこなうという表現が、たとえ何者かに適用されるとしても、それは物語言語に対して焦点化をおこなう人物すなわち語り手（……）に対してでしかないはずだ。（Genette 1983, 邦訳 p.7）

ここでもジュネットは繰り返し強調しているが、彼の考えでは焦点化は、あくまで語り手を主体として成立する情報制御の様態なのであって、認知行為の主体としての作中人物という考えは、そもそもの始めから問題圏から除外されている。

このように見てくると、バルにせよ、花輪にせよ、非焦点化と内的焦点化とを区別する基準として掲げていた「知覚の主体」という基準は、個々の論者の関心に基づく独自の解釈と考えるべきで、ジュネットの焦点化モデルの敷衍・説明としては——誤読とまではいわないにしても——行き過ぎということになる。焦点化論をジュネットが暗に意図していた方向へと推し進めるためには、物語における情報制御の主体（もはや視点の主体でも焦点化の主体でもない）があくまで語り手であることを明示し、作中人物の認知行為の問題を最初から慎重に除去しておくべきである。

ところで、こうしたバルや花輪のような解釈は、『物語のディスクール』自体に内在しているジュネットの論理の曖昧さに由来しているように思われる。そのことは、内的焦点化についての以下のような言及に認めること

ができる。

われわれのいわゆる内的焦点化が、完全な厳密さをもって適用されることは稀でしかないという事実も、指摘しておかなければならない。実際、この物語叙法の原則自体が含意するところをごく厳密に受け取るなら、焦点人物は決して外部から描かれてはならないし、指示されるようなことすらあってはならない。(Genette 1972, 邦訳 p.224)

見てのとおり、ジュネットは再三にわたって作中人物の認知行為を問題圏から外すことを強調しながら、この箇所では、作中人物の「内側から見る」という規定を内的焦点化にあてはめてしまっている。こうした規定は端的にいて矛盾であるが、こうした矛盾を矛盾として退けられなかったところから、バルや花輪のような解釈が生じたのだと思われる。

5 「知覚の対象」の基準について

次に、焦点化の三分法に含まれている二重の基準のうち、内的焦点化と外的焦点化とを分かち「知覚の対象」について考えてみたい。

神郡はこれを「物語言説がその関心的(ごく簡略化して言えば主人公)の内面を描くのか外面を描くのか」(神郡1990, p.48)という相違だと説明している。また、花輪は、内的焦点化と外的焦点化とは「焦点化がおこなわれるのは作中人物の内側か外側か」によって区別されると説明し(花輪1979, p.6)、さらに、外的焦点化に論究する際に、このタイプには「語り手の視点対象となる作中人物の選定」(*ibid.*, p.6)という基準が作用していると考えている。

注意したいのは、こうした説明のうちに既に二重の方向性が表れている点だ。すなわち、「知覚の対象」という基準には、語り手が作中人物の内面を描くのか外面を描くのかという基準とは別に、「関心的」の選定という基準、つまり語り手が数ある作中人物のうちどの人物を中心的に採り

上げるか、一言で言えば、主人公を誰にするか、という基準が盛り込まれている。このうち、主人公の選定の基準に関しては、第7節で採り上げることにする。本節では、語り手が作中人物の内面を叙述するのか外面を叙述するのかという基準について考えてみたい。

とはいえ、この基準に関しては、前節で「知覚の主体」の基準に関して指摘したような難点は特に見あたらない。ただ、先に述べた、作中人物の認知行為という問題との関連で、若干説明を要するように思われる。そこでやや立ち入って、この基準について説明しておこう。

内的焦点化と外的焦点化とが、作中人物の内面が描かれているか外面が描かれているかによって区別されるという説明は、ジュネットの議論に立ち返ってみるに、有名なボンドについての例文でもって内的焦点化と外的焦点との区別が示された箇所を前提としていると考えられる。そこでこの例文を検討してみよう。

(a) ジェイムズ・ボンドはまだ若々しい様子をした五十歳くらいの男を認めた。

(b) グラスにぶつかる氷の音が、突然ボンドにインスピレーションを与えたように思われた。(Genette 1972, 邦訳 p.226)

これらの引用文はいずれも作中人物ボンドの認知行為を示している。ジュネットは、語り手がボンドの真の思考を知っているか否かという基準によって、(a)を内的焦点化に、(b)を外的焦点化に属する物語言説とした。

ここでまず注意しておきたいのは(a)に関してである。この文が内的焦点化とされるのは、先にも述べたように、作中人物の内面から描かれているためではない。ボンドという固有名詞を採用し、その人物を外部から客観的・指示的に語っている点で、この言説の生産者はあくまで語り手である。(ボンド自身は「俺は認める」としてしか語ることはできない。この「厳密さ」を適用すると、先の作中人物の認知行為ということが問題圏に割り

込んでくる)。とすると、この文はむしろ次の理由で内的焦点化に属するといったほうが正確であることになる。すなわちこの文は、語り手が作中人物について、何ら自らの「知」に抑制をかけずに、語りうる情報を最大限語っているのである。これをふまえて(b)を見れば、この文は、語り手が作中人物について、語りうる情報を制限して、語り手自身の推測を語っているとみなすことができる。要するにこの基準は、語り手がその情報を提供するにあたって、作中人物の内面にまでふみこむか、ふみこまないかという基準である。

6 三分法の整合性について

バルや花輪が認めた二重の基準のうち、「知覚の主体」という最初の基準が成立しない以上、ジュネットの焦点化の三分法は、結局、語り手が、作中人物の内面にふみこむか、外面にとどまるかという基準で計られることになる。ところがこの基準だけを用いて三分法を見ると、今度は非焦点化と内的焦点化との区別が明確にできないという不都合が生じてくる。どちらのタイプも、ある作中人物の内面にふみこんだ叙述を行うことに変わりはないからだ。それでは非焦点化と内的焦点化との間にはいかなる差異を認めればよいのだろうか。ジュネットが引き合いに出したそれぞれのタイプに属する作品から考えるに、この二つのタイプの差異は、知覚の主体ではなくむしろ、内的行為に叙述がふみこむ作中人物が、一人（ないし何人か）に限定されているかいないかに認められるべきである。

こうした観点を導入すると、ジュネットの三分法は理論的には基準のいかなる混同もない、整合的なものと考えられるようになる。すなわち、非焦点化とは、語り手が自らの叙述にいかなる制限も加えることなく、その特権を最大限に活用して、あらゆる作中人物について内面も外面も描きうる6)タイプ、内的焦点化とは、語り手がある特定の作中人物（ないしそのグループ）以外の作中人物に関して、自らの叙述に制限を加え、一貫し

て外面的な叙述にとどまるタイプ、外的焦点化とは、語り手があらゆる作中人物に関して自らの叙述に制限を加え、作品全域を通じて外面的な叙述にとどまるタイプというように、かなり明確な三分法が成立し、バルや花輪の批判は解消されることになる。要するに焦点化の三分法は、情報の制限の対象となる作中人物の数が、最小値の場合（非焦点化）、最大値の場合（外的焦点化）、およびその中間形態の場合（内的焦点化）という区分で、それなりの整合性をもって成立しているのである。

7 主人公の選定の基準

このように見えてくると、結局のところ、ジュネットの焦点化の三分法に関して批判が続出した理由は、三分法の基準それ自体にあったというよりも、その説明の曖昧さにあったといえよう。そうした曖昧さの最大の原因は、主人公の選定の基準が、焦点化の問題に割り込んでいることにある。

第5節で述べたように、バルや花輪が指摘した、焦点化の三分法に含まれている二重の基準の一つである「知覚の対象」には、語り手が作中人物の内面にふみこんで叙述を行うか行わないかという基準とは別に、主人公が誰であるかという基準が盛り込まれているのだった。

ところが『物語のディスクール』を翻って検討するに、ジュネットが焦点化を主人公の選定に関する術語として明確に用いた形跡はほとんどない。というより、この点に関してはかなり曖昧で、ジュネットが焦点化の分類に主人公の選定基準を使用していたかどうかは、実は解釈の分かれるところなのだ。おそらくこうしたところにジュネットの言説の揺れを見てとることができるだろう。そのことを如実に示すのが、『八十日間世界一周』の冒頭部分を例にして論じられた以下の箇所である。

ある作中人物について外的焦点化がなされているとしても、別の作中人物についてはそれをそのまま内的焦点化として定義しうることも、

時にはある。たとえば、フィリアス・フォッグに対する外的焦点化であるが、これはすなわち（……）パスパルドゥーに対する内的焦点化にはかならない。（Genette, 1972, 邦訳 P.224）

それにもかかわらずこれを外的焦点化と考える理由というのは、ひたすらフィリアスの主人公としての資格にあるのであって、それがパスパルドゥーを証人の役割に還元してしまうわけだ。（*ibid.*, P. 224）

上に示した二つの引用文は、『物語のディスクール』の本文中では一続きの文章を、便宜的に分割したものである。というのも、それぞれの引用箇所ではジュネットの論理の曖昧さ、もつれのようなものを認めることができるからだ。

まず、第一の引用箇所を見てみよう。一見したところ、ジュネットの理論的厳格さを示しているこの箇所を読んで、まず生じてくる疑問は、そもそも焦点化の議論は何を目的としていたのかということである。『物語のディスクール』において、ジュネットは、焦点化のそれぞれのタイプを説明する際に、個別の作品を例として挙げている。このことから考えれば、焦点化とは、個別の作品を独立した単位とする類型学を成立させるための概念であるはずだ。ところが、上に示した第一の引用箇所では、ジュネットは、一つの作品のうちに二つの焦点化のタイプを認めることができるという。だとすれば、『八十日間世界一周』は、実際には二つの作品だったとでもいうのだろうか。思うに、こうした難点は、焦点化の議論が、作品全体というマクロ・レベルでのいわば詩学的（リンネ的）分類ということを目指しているのか、それとも作品の一部分というマイクロ・レベルでの修辞技法の説明を目的としているのかが、明確ではないために生じている。こうした不明確さは、実は焦点化の議論全体に関わるかなり重大な問題だが、これに関しては別の機会に譲るつもりなので、ひとまずここでは

この引用箇所が、作品の部分的箇所を問題としているものとして解釈しておこう。

われわれが本論で真に問題としたいのは、むしろ第二の引用箇所、というより、第一の箇所と第二の箇所との間に存在するある種の断絶・飛躍である。こうした断絶・飛躍の印象は、第一の引用箇所で示されたような、ある作品の部分が場合によっては内的焦点化とも外的焦点化とも考えるという所属の二重性の問題を、果たして、第二の引用箇所ですべて述べられているように、主人公／証人という基準で解消できるものなのかという疑問に由来している。これが解消できるものとする、つまり、第一の箇所と第二の箇所が、論理的にある種の整合性を保っているとして解釈すると、必然的に焦点化の三分法のうちに——とりわけ外的焦点化の定義に関して——主人公の選定の基準を組み込まなくてはならないことになる。おそらくこれが、バルや花輪の解釈であったと思われる。

しかし、これら二つの引用箇所が果たして本当に論理的な整合性を保っているといえるだろうか。とてもそうは思えない。少し考えればわかるように、われわれはパスパルドゥーを主人公としてこの作品を読むこともできるからだ。結局、こうしたことは解釈の次元に属することであり、物語言説の構造的特性に基づく焦点化の議論にはそぐわないものである。また、仮に読みとか解釈といったファクターを度外視して、あくまで作品に内在する構造上の要素として主人公／証人を決定できる——不可能ではあるまい——としても、こうした基準は、焦点化の分類基準とはまったく無関係に、独立した基準として設定されるべきである。というのも、焦点化とは語り手による情報の制限であると、他ならぬジュネット自身が明示しているのだから。

こうして見てくると、第一の引用箇所と第二の引用箇所との間に、飛躍があることはもはや明白だ。実際には、第二の箇所は、第一の箇所ですべて述べられた所属の二重性の問題を、いささかも解決してはいないのである。だ

とすれば、ここで新たな疑問が生じてくる。『八十日間世界一周』の当該箇所が、外的焦点化とも内的焦点化とも考えるという曖昧な事態は、そもそも何に由来していたのだろうか。

こうした曖昧さは、結局のところ、ジュネットが、焦点化が語り手による情報の制限であるという明確な規定を施さなかったか、もしくは（同じことかも知れないが）自らで焦点化という術語の不明確さにひきずられたところに由来しているように思える。つまり、本来どの作中人物についても内的行為（と外的行為）を語りうるはずの語り手が、ある特定の作中人物を除く残りの者の叙述に抑制をかけるというネガティブな概念とするのか、それとも、本来どの作中人物についても内的行為など知りうるはずもない語り手が、ある人物に関してだけは内的行為を限定的に開示するというポジティブな概念とするのかがもともと不明確なために、ジュネット自身がこの不明確さにひきずられて、第一の引用箇所のような言及を行うはめに陥っているのである。先に述べた、語り手による制限という観点から見れば、同じ箇所が内的焦点化と外的焦点化とに同時に属するなどということはありえない。この箇所はあくまでもフィリアスに関する叙述に抑制をかけた、内的焦点化の物語言説である。

ところが、ジュネットは、こうした焦点化という概念のそもそもの定義の曖昧さに気づかなかいばかりか、これを焦点化の分類基準とは本来まったく無関係である主人公／証人の基準を持ち込んで解消しようとしている。おそらくこの点が、先の二つの引用箇所の間にある断絶・飛躍の印象の原因であろう。

8 新たな基準

こうしてわれわれは焦点化の議論が孕んでいる多くの難点から、この問題を規定すべき新たな基準を、おぼろげながらも抽出することができた。まず、見誤ってはならないことは、焦点化とは語り手を主体とした情報の

組織化の様態を取り扱うための純粋に形式的な分析概念であって、そこに作中人物の認知行為という問題を割り込ませてはならないことである。さらに、この概念が作中人物に課せられる制限を基にしたネガティブな分析・分類概念であることを最初から明示しておくことも重要である。いずれにしても、知覚・認知・見ることのコノテを含み、甚だ誤解を招きやすいこの焦点化という術語に、これ以上固執する必要もないだろう。そこでわれわれは、ジュネットよりもさらに直接的・中立的な「情報制限」ないし「情報操作」という術語を提案したい。

さて、語り手による情報制限の様態を規定するには、以下の二つの基準が必要とされる。すなわち、①語り手による作中人物の内的行為に関する叙述において、叙述制限の対象となる人数は何人か（ゼロか、全員か、一人か）、②主人公は誰なのか、である。以上を用いて、『八十日間世界一周』の冒頭部分についてあらためて考えてみよう。

まず、当該箇所においてフィリアスを主人公とし、パスパルドゥーを脇役・証人たらしめているものは何なのか。もちろん、これを厳密に規定するためには新たに数多くの基準を下位に設定しなければならない⁷⁾。こうした研究はそれだけで独立したテーマを形成するから、ここではこれ以上深く立ち入らないことにしよう。とにかくも、諸々の基準が重層的に絡み合っ、て、フィリアスが主人公、パスパルドゥーが脇役・証人として設定されたと仮定する。

同時にこの作品では、情報制限が主人公たるフィリアスのほうにかけられ、脇役・証人たるパスパルドゥーに関して内的行為が語られる。結果、パスパルドゥーを中心に言説が組織化され⁸⁾、これがパスパルドゥーの視点が採用されているという印象を呼び起こす。

これに対して、ジュネットが内的焦点化の典型例の一つとして掲げたジェイムズの『メイジーの知ったこと』の場合はどうか。この作品においては、主人公たるメイジーに関してではなく、脇役・証人たる他の作中人物

に関して情報制限がかけられる。従って、ある作中人物を中心に情報が組織化され、その人物の視点が採用されているという印象を呼び起こすという点では、『八十日間世界一周』と同タイプの物語言説であることになる。

こうして見てくると、『八十日間世界一周』と『メイジーを知ったこと』との差異は、情報制限の様態にかかわる差異からではなく、主人公の選定にかかわる差異から生じていることがわかる。要するに、『メイジーを知ったこと』の語り手が、一人の作中人物（メイジー）以外の作中人物に関して外面的な叙述にとどまるという情報制限を行いつつ、同時に制限をかけなかった側の作中人物（メイジー）を主人公たらしめるように情報を提供している（こちらのほうが標準的な視点の採用の仕方である）のに対して、『八十日間世界一周』の語り手は、一人の作中人物（パスパルドゥー）以外の作中人物に関して外面的な叙述にとどまるという情報制限を行いつつも、『メイジーを知ったこと』とは違って、制限をかけた側の作中人物の一人（フィリアス）を主人公たらしめるように、情報を偏って提供しているのである。

9 今後の課題

以上、ジュネットの焦点化という概念について考察してきたが、もちろん、これですべて問題が解決されたわけではない。焦点化の問題を明確に記述・説明するためには、他にも解決されなければならない難点が数多くある。おそらくその最大のものが、分類に際しての所属の揺れの問題である。ジュネットの焦点化の分類は、一応は作品全体の分類にかかわるものとして成立しているが、その議論を厳密に個々の作品にあてはめてゆくと、ある作品が非焦点化と内的不定焦点化とに同時に属したり、作品全体としては内的不定焦点化に属するが、部分的には外的焦点化に属するといった事態が発生してしまう。こうした難点は（第7節でも若干触れたように）、焦点化の議論の目的を、作品ごとの詩学的分類の構築にではなく、個々の

物語切片における修辞装置の説明に置くことで解決できると思われるが、このことについては別の機会にあらためて論じることにした。

註

- 1) ジュネットはこの説明をパイオンの三分法からそのまま受け継いでいる。
- 2) 神郡は花輪の説明をふまえて、ジュネットの三分法に二重の基準が含まれていることは「当然の事実」であり、バルの批判は根拠がないとしてジュネットを弁護している（神郡1990, p.48）。しかし、ジュネットが三分法に二重の基準が含まれていることについて明言していない以上、この点に関してバルがジュネットを批判するのは、むしろ当然だと思われる。
 とはいえ、花輪の分類法が誤っているというわけではない。花輪の分類法はジュネットの分類法の説明というよりは、そこから一歩進んだ、独自のモデルと解釈すべきであり、バルよりもはるかに生産的な批判であると思われる。
- 3) 今日ですら「焦点」という話には視覚にまつわる含意がある。
- 4) ジュネットは「物語言説による情報の制御」という言い方を用いることが多い（cf. Genette 1972, 邦訳 p.188）が、場合によっては「語り手による情報の制御」という言い方もする（cf. Genette 1972, 邦訳 p.77）。こうした主語の曖昧さは、彼の物語論が言語学におけるディスクール理論を前提としており、物語言説がその性質上、程度の差こそあれ、不可避的に言説の生産者の生産行為を痕跡づけていることを考慮に入れば、この議論に関与的な区別とは思えない。語り手を作者という実体的概念と明確に区別することが広くコンセンサスを得ている今日では、むしろ「語り手による情報の制御」と明示したほうが分かりやすいと思える。ここでは、誤解の少ないように「語り手-物語言説」としているが、以下の本文では「語り手」だけを用いることにする。
- 5) 花輪は同時に「焦点化の主体」、「焦点化の対象」という言い方もしている（花輪1979, p.5）。ここでも「焦点化」が「知覚」とほぼ同義に使われていることは明らかだ。
- 6) もちろん、可能性として描きうるという意味だ。実際には、このタイプの情報制御を行う語り手が、あらゆる作中人物についておしなべて一様に内面も外面も描く必要はない。このタイプの語り手は、必要とあらば、そのようにも描きうるということを作品を通じて示す、というより、読み手に、そうした自由を有する語り手であることを誇示するだけでよい。
- 7) 思いつくままに列挙すれば、①どの作中人物を採り上げるか（彼について名を出して語るか）という基準、②他の作中人物に比してどれだけ重点

的にその作中人物に関する情報を開示するかという基準、③その人物に関してどのように語るかという基準、④固有名詞による他の作中人物との差別化、⑤時空間の設定の仕方、⑥当該人物を主人公として成立させる読者共同体の読みのパターン、などときりが無い。

- 8) こうした組織化の具体的な指標として、「～と思われる」「～かもしれない」「～だそうだ」といった非-断言的なモードの使用が挙げられる。

参考文献表

Bal (Mieke) : *Narratologie: les instances du récit*, Klincksieck, 1977.

— : *De Theorie van vertellen en verhalen*, 1978; trad. angl., *Narratology: Introduction to the Theory of Narrative*, University of Tronto Press, 1985.

Genette (Gérard) : *Figures III*, Seuil, 1972. [花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール』、書肆風の薔薇、1985. (《discours du récit》の部分の邦訳)]

— : *Nouveau discours du récit*, Seuil, 1983. [和泉涼一・神郡悦子訳『物語の詩学』、書肆風の薔薇、1985.]

花輪光 : 「物語における焦点化」, 『文藝言語研究』文藝編 4, 筑波大学文芸・言語学系, 1979.

神郡悦子 : 「焦点化についての考察」, 『文藝言語研究』文藝編 4, 筑波大学文芸・言語学系, 1990.

Benveniste (Émile) : *Problèmes de linguistique générale*, Paris, 1966.

Brooks (Cleanth) & Warren (Robert Penn) : *Understanding Fiction*, Crofts, New York, 1943.

(大学院前期課程学生)

Considérations sur la notion de focalisation

Koichiro HAGIWARA

La présente étude cherche à donner une nouvelle interprétation de la notion de focalisation que Gérard Genette a proposée à la place de celle de point de vue dans son «Discours du récit» (Figure III), en examinant plusieurs essais précédents d'explication, qui à mon avis comprennent tous confusément deux critères différents renfermés dans cette notion.

Certes, il semble que ces deux critères fonctionnent suffisamment dans la classification des récits en trois types: focalisation zéro, focalisation interne, focalisation externe. Mais l'un des critères ne doit pas être considéré comme ce qui concerne le «sujet de perception», c'est-à-dire indique qui perçoit, le narrateur ou le personnage, parce que le terme de focalisation désigne la régulation de l'information par le narrateur, non pas le degré de la perception psychologique du personnage, comme Genette lui-même insiste sur ce point à plusieurs fois. L'autre critère, qui concerne l'«objet de perception» et indique, pour parler brièvement, ce qu'on perçoit, l'intérieur ou l'extérieur du protagoniste, est équivoque parce qu'en ce cas ce terme en lui-même désigne un double sens, c'est-à-dire ce qu'on choisit comme protagoniste et à quel point pénètre la description. En ce qui concerne les essais d'explication mentionnés ci-dessus, leurs confusions viennent bien aussi d'ambiguïtés de la discussion même de Genette, qui à mon avis reflètent son hésitation à traiter le récit comme une sorte de dispositif de commande formel et fade. Mais nous n'en restons pas à ce point, ayant pour but d'éclairer le plus exactement possible le problème même de focalisation.

キーワード：ジュネット 視点 焦点化 情報制限